

視覚障害者から選ばれる 育成団体へ



ひと口に視覚障害者といっても、その実態はさまざまでニーズもさまざまです。
盲導犬ユーザー、現に盲導犬を希望している人、さらに潜在的希望者、
一人ひとりへどんなサポートができるか、日本盲導犬協会は常に考え、実行しています。



時代とともに変化する 視覚障害者像

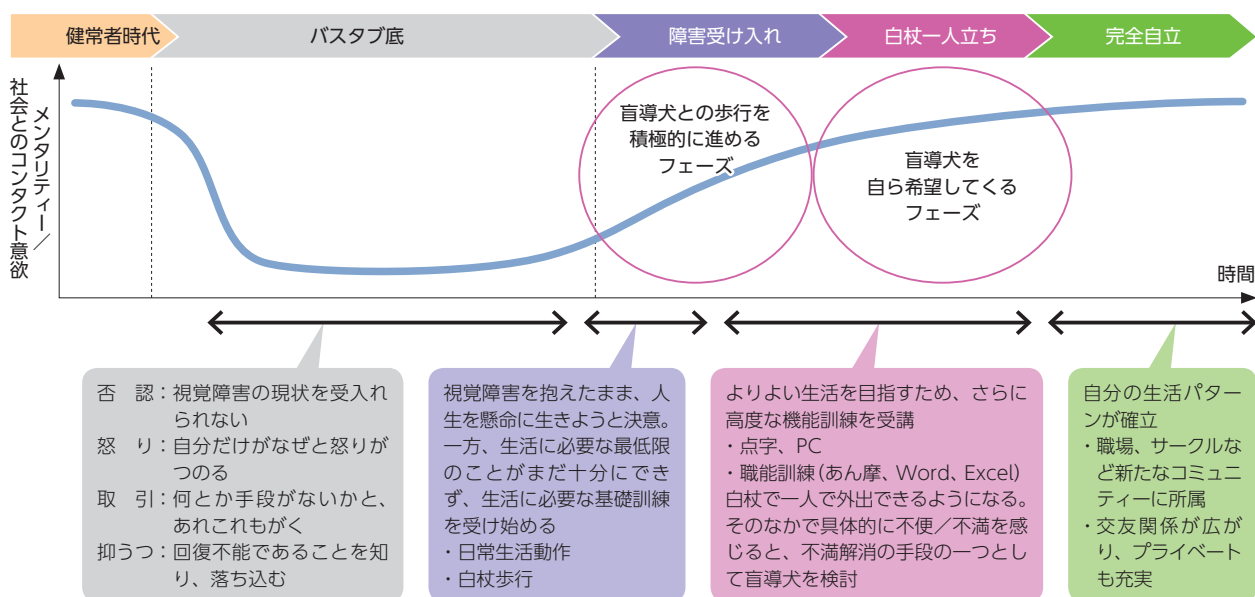
視覚障害者というと、全く何も見えず光も感じない全盲の人、そして盲導犬というとその全盲の人が対象者というイメージを持っていませんか。実は「視覚障害者=全盲」というイメージがあるため、何かしら見え、光を感じている「ロービジョン(LV・弱視)」の人が8割以上占める中、LVへの対応が遅れています。盲導犬ユーザーもLVの方が8割ほどを占めています。現在、わが国の視覚障害者数は31万人ほどですが、こうしたロービジョンへの対応が求められています。

求められるロービジョンへの対応

こうしたLVの人は中途失明者が多く、障害や自らの状況を受け入れるまでに少なからず時間がかかります。生まれつきや幼少の頃から全盲の方は、視覚特別支援学校等で専門の教育を受けて、生活や移動の技術を習得されて社会生活を送っており、「あまり困っていない」と感じている人が多いようです。しかし、中途失明者では、その困窮度は飛躍的に高まります。そして自信喪失や孤独感などが膨れあがり、精神的に追い込まれる人が多く存在するのです。

BCG(ボストン・コンサルティング・グループ)

中途失明から社会復帰までのプロセス例



BCG(ボストン・コンサルティング・グループ) 作成

が、中途失明者が失明時点から社会復帰（その人らしい自己実現）までのプロセスを表現した図表があります。そこには視覚障害が起り、否認、怒り、抑うつなど、さまざまな苦悩に直面している姿、そして障害を受け入れ、盲導犬ユーザーとなり、本格的な社会復帰のプロセスに入るまでの、心理面的変化が表されています。

●第1段階…「バスタブ底（ショック、否認、混乱時）」状態に陥る

視覚障害を認められない「否認」、なぜ自分がという「怒り」、何とかならないのかと「取引」、そしてどうにもならないと知り、落ち込む「抑うつ」など、気持ちがさまざまに揺れ動く時期です。

●第2段階…「障害受け入れ」へと進む

自分に障害があっても、自分の生き方の一つとして受け止める時期です。行政サービスによる同行援護や生活訓練、白杖歩行訓練、パソコンやあんま鍼灸などの職業訓練などを受け始める人が多いようです。

●第3段階…「積極的な社会参加」へとさらに前進する

生活の質のさらなるアップのため、日常生活動作や白杖歩行などに加えて、点字、パソコン、さらに職能訓練（あん摩、Word、Excelなど）、趣味やスポーツに取り組むパワーが出てくる時期です。

●第4段階…「自分らしい自己実現」へと到達

自分の生活スタイルを見だし、行政制度や周囲の助けもうまく受けながら、目標を持って安定した生活を送るようになります。

この社会復帰のプロセスで、盲導犬への興味を持つ時期、さらに盲導犬ユーザーになるための積極的なアプローチを考える時期は、第3段階の「積極的な社会参加」です。当協会は、第2段階の「障害の受け入れ」時期の方へのアプローチを積極的に始めています。

そのため、まず第1段階の「バスタブ底」後期や第2段階の「障害受け入れ」の状態にいる視覚障害者に対しては、眼科医療機関や支援機関と連携して、生活訓練や歩行訓練を実施して、視覚障害リハビリテーションを行いサポートします。

並行して、体験歩行会や盲導犬説明会を開催して、盲導犬と歩くことを伝えています。盲導犬は生きた歩行補助具ですが、同時にいつもそばにいる存在です。盲導犬と歩くことで「一步を踏み出す勇気をもたらした」（別冊「ユーザーは語る」参照）など、障害受け入れを促進される方も多くいらっしゃいます。

一人ひとりが盲導犬というパートナーと自分らしい自己実現に向けて一步踏み出してほしいと願っています。そのために少しでも早い時期からのアプローチをしています。

2 「盲導犬と歩く」ことの意味

ロービジョンの人の増加や高齢化、孤立化など、社会情勢の変化により、盲導犬のパートナーとなる視覚障害者像が大きく変化している今、再度「盲導犬と歩く」ということの意味を確認しておく必要があると考えます。

目立つ「盲導犬」との歩行は 何をもちたすのか

盲導犬と歩くということ、つまり盲導犬歩行は、視覚障害者にとって大きな人生のターニングポイントになります。

盲導犬歩行には、いくつかの特徴があります。

まず、盲導犬という「とても目立つ存在」と常に一緒にいるということです。これは世間に対して、自らに「盲導犬ユーザーである」という一種の看板を背負って歩いていることになります。そして、とても目立つ存在とともに街を歩くことは、強い「自己開示」の意志を示すことにもつながります。

また、盲導犬ユーザーが街中を歩くときに大切なことは、周囲の人との相互作用を十分に意識しなければならないということです。そのため、盲導犬ユーザーになるための歩行訓練にも白杖訓練と同様、周囲の人への「援助依頼」という科目があります。苦手な方が多い科目です。援助依頼は障害者であるという自分の中から生じる心の苦しみ「自己受容」と他人から負わせられる心の苦しみ「社会受容」の2つの受容にかかわっていると思われま

す。

私たちは、多くの盲導犬ユーザーの方と接するなかで教えられることがたくさんあります。

その一つに、視覚障害者が「盲導犬と歩く」ということは、単にA地点からB地点へ移動することだけではなく、街中で周囲の人たちとかかわり、目的地に到着した後に、自分の目的を果たすことです。この行為は、街中で周囲の人たちと直接かかわりを持ち、そこから自身の障害について考え、再確認することでもあるのです。そして、移動することは手段であって、B地点に行って何をしたいのか、何をしようとするのが大切です。

つまり盲導犬というパートナーを得ることは、社会参加の手段を得ることで、一個人として新たに生き直すことであり、新たな目標や自分自身の価値を見つけて、再び歩き出すことです。この再確認をお手伝いするのが盲導犬訓練士であり、盲導犬歩行指導員です。そして、われわれ日本盲導犬協会の活動意義でもあります。

盲導犬に「癒やし」の機能を求めるのか

最近のペットブームや、セラピードッグなどが注目される風潮から、人と動物との関係性を、心を満たすこと、つまり「癒やし」を重視する視点からのみ見る傾向が高まっているように感じます。

しかし、当協会は盲導犬には「癒やし」の機能があるので盲導犬を持ってください、とは言いません。盲導犬が「生きた歩行補助具」として、ユーザーとともに、目的地まで安全に確実に歩くという機能を第一にしています。視覚障害者は、危険や困難がたくさんある屋外を、盲導犬から得た情報を頼りに歩きます。なによりも安全な歩行です。「癒やし」は副次的な機能です。とはいえ、実際には「癒やし」を超えた存在だ、というユーザーはいます。

もう一つ大切な関係があります。盲導犬とそのユーザーは、単に歩行を補助してもらうだけの一方通行ではありません。ユーザーもまた盲導犬が生きていくためのさまざまなこと、たとえば食



いつでも、どこでも。かけがえのないパートナーです

事や排泄、健康面など、生命を守っています。

盲導犬は、視覚障害者と相方向の対等な関係、つまりパートナーであり仲間です。視覚障害者になると、自分はもう何もできない、社会の厄介者、家族のお荷物と感じる方が多くいます。しかし、盲導犬にとってユーザーは自分を守ってくれる頼もしい存在なのです。誰かのために生きている、自己肯定感の芽生えです。盲導犬の世話をすることは大変ですが、それ以上に大きな心の支えを運んでくれます。

手を伸ばせば横にいる、ともに生きている存在です。

3 社会環境で変わる 盲導犬希望者推計数

「盲導犬を希望する人はたくさんいらっしゃるのでしょうか?」。これは私たちがよく受ける質問です。では、実際はどうなのでしょうか。

潜在的希望者を含めると3,000人ほど

かつて盲導犬は“高根の花”で、希望してから3年から5年も待つのは当たり前といわれていました。1998年(平成10年)の日本財団の調査では、「盲導犬を今すぐ希望する」4,700人、「近い将来希望する」を含め、7,800人という調査があります。20年も前の調査です。

今は、「3,000人ほどの方が希望しています」とお答えしています。これは、BCGが日本盲導犬協会と行った試算を基に、全国盲導犬施設連合会8団体で検討、修正した推計数が3,000人です。次ページはその推計検討です。

推計値は社会状況、盲導犬団体の取り組み方、盲導犬の受け入れ状況で数値が変わります。パソコンやスマートフォン、タブレットなどのさまざまな端末機器の普及により、外出しなくても、インターネットを介して買い物や情報収集、情報交換を行うことが可能になってきました。視覚障害者の高齢化など社会状況の変化とともに、白杖、パソコン、点字、生活訓練などの自立訓練を行う人も減少傾向にあります。こうした状況は、高齢化による外出意欲の低下、人による同行援護体制の推進などによる影響によるものと考えられます。

このことは、「外出しない人」を増やす方向に動き、白杖訓練や盲導犬が選ばれない方向になります。

盲導犬の受け入れ拒否、盲導犬を持つと逆に出

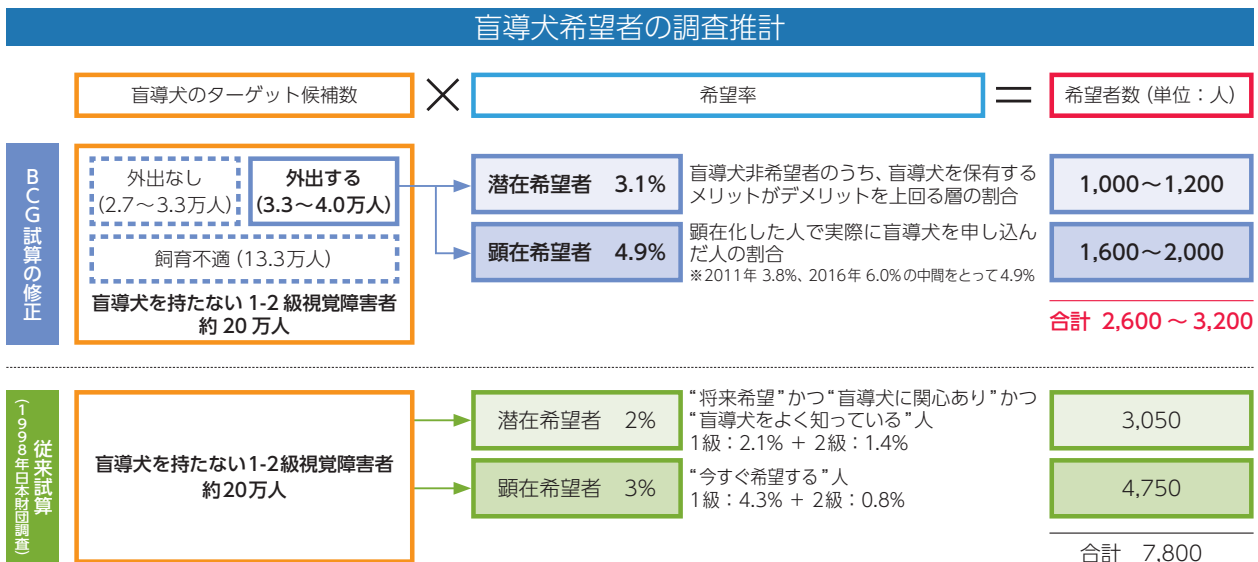
張しにくい、一番行きたい病院には盲導犬と行けない、となると、盲導犬を持つデメリットがメリットを上回り、希望率が下がります。一方、身体障害者補助犬法や障害者差別解消法の成立による法的な裏付け、盲導犬デモンストレーションなどの啓発活動で盲導犬を知ってもらうことは、盲導犬受け入れを促進し、視覚障害者の外出意欲を上げ盲導犬を選ぶ方向となります。

そして、盲導犬を選ぶ方向になるのは、盲導犬歩行へのプラスのイメージ、盲導犬との生活へのプラスのイメージを視覚障害者に持ってもらうことです。

当協会は、2011年（平成23年）から積極的に盲

導犬ユーザー開発を始めました。盲導犬に関する正確な情報を視覚障害者に届け、盲導犬が選ばれるようにする活動です。2011年当時、顕在希望者のうち実際に盲導犬を申し込んだ人の割合は3.8%でしたが、2016年には6.0%まで上昇しました。この上昇はある意味で「日本盲導犬協会」が選ばれた証しだと思います。これは、新規ユーザーへの貸与数（下表）にも表れています。

この間、「日本盲導犬協会の盲導犬の質」「盲導犬取得8年間のサポート体制の質」への信頼が上昇したことが新規貸与数の多さのベースにあります。盲導犬を取得するまでの取り組み、ユーザー開発も大きく貢献しています。



盲導犬頭数の推移

	2016年度				2015年度				2014年度				2013年度			
	育成頭数			年度未 実働 頭数	育成頭数			年度未 実働 頭数	育成頭数			年度未 実働 頭数	育成頭数			年度未 実働 頭数
	新規	代替	合計		新規	代替	合計		新規	代替	合計		新規	代替	合計	
北海道盲導犬協会	3	6	9	93	6	5	11	97	5	10	15	94	4	5	9	95
東日本盲導犬協会	1	3	4	29	3	2	5	32	0	3	3	32	2	4	6	35
アイメイト協会	4	24	28	248	8	22	30	261	8	21	29	264	5	27	32	271
日本盲導犬協会	20	26	46	232	20	24	44	218	11	30	41	223	23	18	41	224
中部盲導犬協会	1	3	4	55	2	6	8	57	5	3	8	58	3	6	9	57
日本ライトハウス	4	16	20	136	6	13	19	143	11	11	22	152	3	17	20	164
関西盲導犬協会	3	6	9	77	1	9	10	84	1	11	12	88	1	9	10	92
九州盲導犬協会	4	2	6	46	2	3	5	45	2	4	6	45	3	3	6	45
兵庫盲導犬協会	1	2	3	16	2	3	5	15	1	2	3	17	3	1	4	18
日本補助犬協会	3	0	3	16	2	0	2	13	2	0	2	11	1	0	1	9
全国盲導犬協会	2	0	2	3	1	0	1	1	0	0	0	0	-	-	-	-
合計	46	88	134	951	53	87	140	966	46	95	141	984	48	90	138	1010

社会福祉法人 日本盲人社会福祉施設協議会 「盲導犬訓練施設年次報告書」より



4 盲導犬希望者を待つからユーザーに育てるへ

盲導犬の実働数は2009年(平成21年)をピークに7年連続で減少し、2017年(平成29年)3月末には951頭まで減少しました。白杖歩行や日常生活訓練(ADL)などの機能訓練数も減少するなか、新規に盲導犬を希望する人が減少傾向にあることを感じていました。

中途失明者が増え、視覚障害者のリハビリテーションの情報が届いていないことが明らかになってきました。待っていてもダメで、積極的に情報を届ける必要に気づいたのです。他協会に先駆け始めたのが盲導犬希望者開発です。

盲導犬ユーザーになる“匂”を逃さないサポート

当協会は、盲導犬希望者が減少しているのではなく、正しい盲導犬の情報が視覚障害者に届いていない、また盲導犬の取得は大きな生活の変化になるので踏み切れない人が多くいるのではないかと考えました。2011年(平成23年)から盲導犬ユーザー開発がスタートしました。

視覚障害リハビリテーションを行っている施設で盲導犬体験を実施したり、訓練施設で盲導犬との1泊2日体験会をしたりしました。そうした中から、現在の盲導犬希望者開発が生まれました。

盲導犬希望者を4つのステータス(A~D)で管理し、そのステータスに応じた情報発信や体験、取得に向けた課題解決のサポートをしていくものです。

データベースで犬のステータス管理方式をユーザー管理にも取り入れました(盲導犬の管理は第1章第2節61ページ参照)。

A 問い合わせ者：盲導犬に少しでも関心のある方

体験歩行会に参加した方や直接盲導犬取得の問い合わせのあった方で、当協会とのかかわりが始まると「問い合わせ者」に登録します。まずは盲導犬の作業や取得条件、自分にとってメリットがあるかなど、盲導犬を正しく知ってもらいます。

当協会には、常に300人程度の「問い合わせ者」のデータがあり、一定期間でデータを更新しています。

B 希望者：盲導犬取得を前向きに検討し始めた方

協会の説明会に参加した人を「希望者」登録します。1泊2日の説明会の中で、本人と協会が納得した上で申請書を交付します。すぐに取得に踏み出

せない方は、体験歩行を何度か経験していただくなど、コミュニケーションを取り続けます。また、申請書を交付できる状況にない方には、課題を確認してその課題解決のお手伝いをします。

C 申請者：盲導犬取得の意思を示した方

交付した申請書が提出され受理されると「申請者」です。自宅や職場を訪問し、歩行状況や飼育環境を確認し、犬のマッチングに必要な情報をデータベースに登録し、訓練部と共有します。訓練部、申請者と調整しながら共同訓練日程を決めていきます。

D 待機者：共同訓練の日程が決まった方

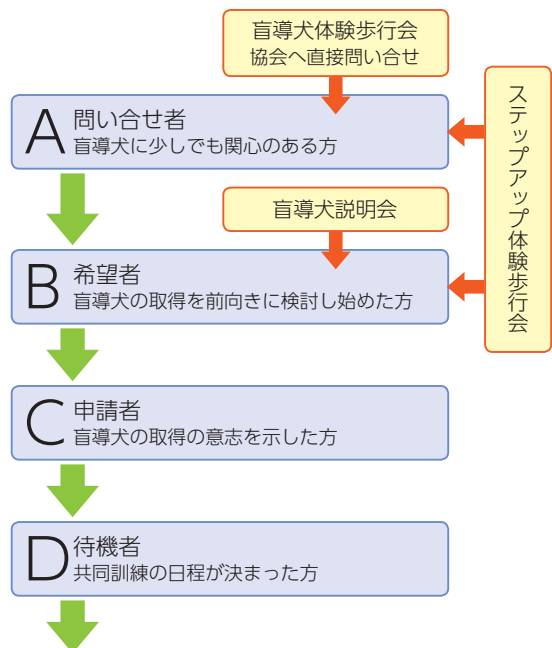
ここからは実質、訓練部が担当します。共同訓練を担当する盲導犬歩行指導員が自宅に行き、アセスメント面接を行います。そして、「マッチング」を行います。一人ひとりにあったQ犬(Qualified: 資格要件を満たし、資質・能力のある)の選定です。待機者もそうですが、盲導犬も1頭ごとにその性格や特徴が異なります。待機者一人ひとりの性格やライフスタイル、生活状況にもっとも適していると考えられる盲導犬の選定はとても難しい工程です。

担当歩行訓練士は、選んだQ犬をさらに待機者に合うようにカスタマイズ訓練をして共同訓練を迎えます。

① 盲導犬体験歩行会

- ・開催場所：主に視覚リハ関係施設やイベント(機器展、ワークショップ)

人のステータスの流れ



- ・形式：会場への訪問型
- ・対象者：施設の場合は利用者、イベントは参加者
- ・内容：それぞれの見え方に応じた盲導犬の有効性を体感してもらうだけでなく、盲導犬との生活や取得に関する情報を発信します。
- ・結果：2015年～16年の2年間で参加した人は延べ544人。うち盲導犬取得に関心を持った175人が「問い合わせ者」に新規登録し、その中の71人が次のステータスに進みました（神奈川センターのみ、重複なし）。

② 盲導犬説明会

- ・開催場所：訓練センター
- ・形式：訓練センターへの来所型（基本は1泊2日）
- ・対象者：A 問い合わせ者
- ・内容：盲導犬の有効性をより明確にし、取得後の生活がイメージできるよう、歩行体験だけではなく、生活体験も行います。
- ・結果：参加者全員が必ずしも盲導犬を今すぐ取得できる状態ではないことがわかります。多くの方は、見え方、生活環境、仕事、将来、気持ちなど、それぞれに課題があり、盲導犬取得には安易に踏み切ることにはできないのが現状です。たとえ申請書を交付しても、すぐには提出されないこともあるため、不安や課題があれば共有し、取得に向けて安心して申請できるように時間をかけてサポートしていきます。

2年間で87人が参加して46人に申請書を交付し、40人が申請しました。

③ ステップアップ体験歩行会

- ・開催場所：集まりやすい駅に近い会議室
- ・形式：中間型アウトリーチ
- ・対象者：盲導犬歩行に興味のある全ステータス対象
- ・内容：本人の見え方や状況に合わせた歩行や相談
- ・結果：当初、既存登録者であまり進展のない人（250人ほど）に再度盲導犬に関心がないか電話連絡し、関心のある方はこの体験歩行会に参加をすすめる新しい取り組みを2015年から始めました。ところが、「一度体験したけど宿泊はプレッシャー」や「もう少し体験したいけど1泊2日は難しい」など、ちょっとした理由でステップアップできない参加者がいました。また、前回の体験から時間がたってしまった人や直接の問い合わせで体験歩行が初めての人など、盲導犬歩行に関心のあるすべての人のステップアップとして、参加対象者を幅広く考えています。

2年間で86人が参加して、ステップアップしたのは27人です。

選ばれるためには、視覚障害者側に立つこと

リハビリテーション部をユーザーサポート部に組織変更し、事業部目標がリハビリテーション実施人数から、盲導犬ユーザーの育成とユーザー満足度の向上へ変わりました。これにより盲導犬希望者へ積極的に情報発信や個別支援を行い、希望者本人の盲導犬を持つべき「旬」を逃すことなく、取得につなげていくことができるようになりました。

2年間に会った500人以上の視覚障害者の中で、「障害者手帳1級じゃないとダメ」「全盲でないダメ」と認識していた人は多く、盲導犬の作業について、取得方法や条件、関係法令などについて理解している人は少数でした。本人が第三者から情報を聞くだけではなく、直接会うことで正しい情報を伝えることの重要性を再確認できました。

また、盲導犬ユーザーも高齢化が進む中で、以前までは「盲導犬は見えなくなってから」や「家族の援助が受けられなくなってから」と待っていた人に、協会から積極的に働きかけることで、かかわりが持てる年齢が早まり、実際、当協会ユーザー全体の平均年齢が58歳であるのに対し、この3年間の新規ユーザー登録時の平均年齢は45.6歳と10歳以上も若くなりました。

さらに、待機者のステータスを上げるために、事前に強化しておいたほうがよいケースがあります。まずは、歩くための筋力の強化。10年以上も一人で歩いたことのない方は、歩行上の安全の判断ができなくなっています。また高齢者は英語のコマンドが頭と結びつきません。そのため共同訓練に入る前の事前訓練が導入されました。

ここで活躍したのが、職員が持っているリハビリテーションスキルです。盲導犬歩行するための支援計画が作られ実施されました。今では、単独歩行に必要なスキル取得のために白杖歩行訓練を積極的に勤めており、ユーザーサポート部で行ったり、視覚障害者のリハビリテーション関係団体と連携して行ったりしています。

視覚障害者にとって、盲導犬取得は、たとえ無償貸与であっても、家庭環境や職場環境を整え、何より生活が大きく変化することへの準備が必要で、それを当協会と一緒にしてお手伝いをすることが大きな成果につながっています。

希望者を待つだけだった協会、正しい情報が届かないから希望者が少ないと嘆いていた協会から

一歩踏み出して、視覚障害者の側に立って情報を送る協会に生まれ変わったのです。実は視覚障害者側も情報を待っていて、つかみたくてもつかめなかった状況があったのです。つながった方の一人ひとりを大切に対応していく。選ばれるためには、待っていてはダメなのです。ただ情報を出せばいいのではなく、出した情報が使われることを確認できるまでフォローすることが大切だと学びました。選ばれるために……。

5 8年後のハッピーリタイアメントを目指して

貸与後のサポート

「待機者」になると訓練部にバトンタッチします。そして、共同訓練に進み、修了すると、いよいよユーザーは「使用者」に、訓練犬は「盲導犬」に、ステータスを変更します。

訓練修了後の直後フォローアップでは、ユーザーが通勤・通学、買い物などで使う自宅周辺の道を使って、盲導犬訓練士や歩行指導員が盲導犬との歩行を確認する訓練を行います。1か月後、3か月後、6か月後の定期フォローアップ。そして、新人ユーザーにとっては一大イベント、共同訓練修了時に約束した「出発式」への参加です。知らない場所へ、自宅から一人の力で行きます。道順を考え、切符の手配、各駅に援助依頼の連絡など……。当協会も訓練部とユーザーサポート部が協力して安全確保の体制を整えます。この「出発式」を乗り越えれば一人前の盲導犬ユーザーです。気持ちを新たに、盲導犬との新しい暮らしをスタートさせていきます。

ここで訓練部は定期フォローアップと問題解決フォローアップの担当となり、見守り役はユーザーサポート部に再度バトンタッチです。少なくとも年に1度は協会職員がユーザーと直接お会いして状況確認を行い、課題を発見すれば訓練部につながり、フォローアップが行われます。

当協会は「Face to Face」による課題の早期発見、早期対応を心がけており、ユーザーからの連絡、コンタクト情報はすべてデータベースに登録、月1回の報告が行われ、情報は共有されます(第1章第2節58ページ参照)。

出発式の次の大きなイベントは「盲導犬6歳時コミュニケーション会」です。8年間の盲導犬人生の振り返り地点、犬にも加齢による変化が表れて

きます。ユーザーにも変化があり、盲導犬ユニットの関係を見つめ直してもらいます。何よりも、長いようで短い4年先のハッピーリタイアメントを意識してもらい、高齢に向かう犬の飼育法を確認します。早い時期から「盲導犬との別れ」を意識してもらうことで、盲導犬の引退を前向きにとらえ、ペットロスに陥ることなく、次の「代替」へと進む一助としています。

こうした対応は、盲導犬ユーザーへのサポートだけでなく、ユーザーの盲導犬使用技術の向上や正しい管理意識の定着につながり、トラブル発生を未然に防ぐことにつながっています。

当協会は、「歩くこと」は「犬の目を使って、自分自身で判断を下して歩くこと」と考えています。判断することは大変ですが、その積み重ねが主体的に生きることに繋がります。前出(75ページ)でお話した第4段階「自分らしい自己実現」へと到達、セルフエスティーム(自己肯定感)の獲得です。盲導犬で便利になったという「生活の質」ではなく、盲導犬との生活で「人生の質」が向上した。視覚障害者のそうしたQOLの向上にかかわりたいと願っています。

6 協会独自の リハビリテーション事業

当協会のリハビリテーション事業は、視覚障害者リハビリテーションを行う事業者がない東北地方に、「東北あったか福祉計画」として仙台訓練センター開設時の2001年(平成13年)当初から、盲導犬訓練とともに白杖訓練、日常生活訓練(調理や掃除、洗濯など)、PC訓練など機能訓練を事業に組み込んだことに端を発します。

視覚障害者に寄り添うリハビリテーションの展開

当時、視覚障害者の機能訓練は、訓練施設に通所して受けるか、長期間入所して受けるのが主流でした。通所といっても、東北地方には訓練施設がないので受けることはできませんし、入所は数か月から1年の長期間のプログラムですので仕事を休んで行くことは容易ではありませんでした。

当時の訓練部長は、当協会の特性を生かして、訓練士が自宅に伺っての「在宅生活訓練」、1週間宿泊型の「短期リハビリテーション」、視覚障害児とその家族を対象とした「障害児キャンプ」と次々と新たな形の機能訓練を行いました。

●視覚障害者在宅生活訓練

白杖による歩行訓練を中心に、パソコン、点字、生活訓練などを、在宅で実施しています。仙台訓練センターがある宮城県だけでなく、東北と新潟7県で行っています。

2016年度（平成28年度）は、4センターで延べ869訓練が行われました。

●短期リハビリテーション訓練

「楽しい訓練を！」をモットーに、1週間宿泊型のリハビリテーション訓練を行います。訓練内容には、白杖歩行、日常生活、パソコン、点字、ロービジョン訓練などがあり、希望のプログラムを選ぶことができます。夏休みを利用して参加できる、中学生・高校生向けの短期リハビリテーションも実施しています。ここでは盲導犬体験歩行も行っており、「問い合わせ者」の登録につながっています。

2016年度は、スマイルワン仙台と富士ハーネスで計9回の短期リハビリテーション訓練を実施しました。

●視覚障害児キャンプ

視覚障害のある小学生とその家族を対象に行う滞在型サマーキャンプ「ワン！ぱくっ子サマースクール」は、スマイルワン仙台で毎年行っています。日常に役立つ生活体験から普段できない体験まで、さまざまな体験を通して自立心を養い、可能性を再発見してもらうのが目的です。また、ご家族には子供との関係のつくり方を考える機会にしてもらいます。小学校低学年で参加した視覚障害児から盲導犬ユーザーも生まれました。

●眼科医とつながる講習会

「失明宣告は眼科医の敗北」といわれています。

そのため眼科医からリハビリテーションにつながらない現実がありました。眼科医院で、眼科医や看護師、患者やその家族を対象にリハビリテーションの講習会の開催を積極的に行い、今では国立大学医学部のロービジョンクリニックでリハビリテーションを行っています。リハビリテーション大会やロービジョン学会へも参加し、研究発表などを行い、レベルアップに努めています。

視覚障害者が移動する方法は3つあります。同行援護従事者（ガイドヘルパー）等による手引き歩行、白杖歩行、盲導犬歩行です。この3種類から盲導犬歩行だけを選んでください、ということではありません。3種類の歩行をTPOで使い分けて、自分の歩行をデザインしていただきたいのです。その際、ぜひ盲導犬の使用を考え、選んでいただきたいと思っています。さらに、11の盲導犬育成団体の中から、日本盲導犬協会を選んでいただける協会を目指しています。

そのために、当協会は、盲導犬ユーザー、盲導犬に興味を持っている人、視覚障害によって悩んでいる人、そんな方々にそのときどき、一人ひとりに必要な情報の提供やサポートのあり方に関して、さまざまな角度・視点から考え、新しい方法を模索しています。視覚障害のある人が、不安に感じていること、不便に感じていることなど、何でも相談できる体制づくりをさらに進めます。

すべての人のQOL、つまり「人生の質」がアップするために、日本盲導犬協会の扉は常に開かれています。🐾



「ワン！ぱくっ子サマースクール」では、大人も子供も大はしゃぎ。勇気と自信を育みます



短期リハビリテーション。調理にも挑戦です